

# 1. エビデンス活用のタイミング

## ●事前

- 複数の政策選択肢の中から、最も望ましい効果をあげる、もしくは最大化する) 政策を選択

## ●事後／モニタリング

- 設定指標による評価  
無理矢理あてた設定指標・代替指標は、本質から目をそらす内外へのアリバイになるので×。

## ●試行錯誤プロセス

- 設定指標による評価とシステムティックレビューに照らした再設定  
試行錯誤を許容しないEBPMはデメリットが小さくない。

## 2. データ収集とエビデンス流通のフレームワーク

---

### ● データ収集の条件整備とフレームワーク

- データ収集の条件整備とフレームワークが重要。現在は、これを欠く状況。データ同士の紐付けすら心許ない。

### ● データ・ファクト・エビデンスの違い

- データだけでは機能しない。データ→ファクト→エビデンス（因果関係の解明）の導出が必要。
- 良質なデータがあっても、導出されたエビデンスを、政策規範（例：ウェルビーイングの実現、社会的公正の実現、等）に照らして、解釈したり、翻訳したりすることが可能になる。

## 3. エビデンス支援組織の重要性

---

### ●生半可なEBPM

- ・ 誤読、つまみ食い、伝言ゲームの失敗の温床にも

### ●エビデンス収集・翻訳・支援組織／それを担う人材育成・採用

- ・ 餅は餅屋。政策立案者は、政策立案の専門家であるが、エビデンスの吟味・翻訳の専門家ではない。専門家がエビデンスの吟味・翻訳を担った上で、翻訳者と政策立案者の対話を実現する。

## 4. 更に許容・尊重したいこと

---

### ●失敗・撤退・やり直し（試行錯誤）の許容

- ・ エビデンス活用のタイミングは、新規政策導入時だけでない。失敗を許容しなければ、新基軸は切り開かれない。

### ●エビデンスにならないものの許容

- ・ 定量的に切り取れるものと、いかんともし難いものがある。コンプライトに固執しない。

### ●最前線の専門家の暗黙知・経験知の尊重（定量的可視化を進めることも含む）

- ・ 教育政策において、専門家（教職員）の暗黙知の価値剥奪が、効力感や専門的アイデンティティにマイナスに働き、教育の質低下をもたらし得る可能性。これを低く見積もらない。